九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語中の外来語における母音呼応

大江, 三郎

https://doi.org/10.15017/2332782

出版情報：文學研究. 66, pp.133-147, 1969-09-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

日本語中の外来語における母音呼応

大　江　　三　郎

Ⅰ．本論文の目的

外国語の子音Cが外来語として日本語に入ると一般に子音＋母音 CV になる．そして日本語中に挿入されるVが何であるかは一般的型としてきまつているのだが，これには時折例外が見出される．本論では，これら例外を注意深く調べ(1)それが大きくみて二種類に分けられることを示し，(2)これら二種類の例外が共通の性格をもち類似の原因から来ることが論証される．また，これらを調べていくうちに，副次的にではあるが，(3)外来語の発音成立に関するいくつかの原理が示される．なお題目中の「母音呼応」とは，類似の現象としてのこれら二種類の例外に与えられた呼び名であるが，これの意味は以下のⅢで明らかにされるであろう．

Ⅱ．外来語中に挿入される母音―規則と例外

外国語の語末または他の子音の前に起るCは，外来語として日本語に入ると一般に CV となる．例えば英語 bus→バス [basɯ]，bust→バスト [bas*ɯ*to][1] である．本論では英語以外の言語から入った語も若干扱われるが，ここでは英語から入つた語のみを考えると，新たに挿入される母音

1）東京方言でバストの二拍めの母音は規則的に無声化し，更に落ちることもある．本論文では無声化母音は斜体で表わす．なお，本論文では外来語の発音として東京方言における発音のみを考えるが，外来語の発音も，母音の無声化，アクセントの型などをめぐって諸方言間に大きな違いがあるのだから，これだけでは不十分ではないかという疑問が生ずるであろう．しかし，私は東京方言のみを考慮すれば大体事足りると考えている．このことについては，大江三郎『外来語および外国語としての英語の発音に現われる促音と撥音について』「語学教育」283 (1968)，語学教育研究所，pp. 8-9 参照．

(epenthetic vowel; paragogic vowel) は一般に /u/[ɯ] である.

英語	日本語	例
/-k/	/-ku/	sack→サック
/-s/	/-su/	bus→バス
/-f/	/-hu/	knife→ナイフ
/-m/	/-mu/	team→チーム
/-l/	/-ru/	bell→ベル
/-g/	/-gu/, /-ŋu/	league→リーグ, リーク°[2]
/-z/	/-zu/	jazz→ジャズ
/-b/, /-v/	/-bu/	club→クラブ, curve→カーブ

このように /u/ が好まれるのは, この母音がきこえの点で最もきわ立たないためであろう.[3]

日本語の子音音素で /u/ を伴わないものがあるため, 次のような例が生ずる.

英語	日本語	例
/-t/	/-to/	seat→シート
/-d/	/-do/	lead→リード

また英語の /-č/, /-ǰ/ は硬口蓋音としての性質から, 日本語に入ると

2) /ŋ/ に始まる拍はカ°キ°ク°ケ°コ°で表わす.

3) Denzel Carr ("Comparative Treatment of Epenthetic and Paragogic Vowels in English Loan Words in Japanese and Hawaiian, "*Language Learning* XIV [1964], p. 36) は日本語が無声子音の間の /u/ を落すという事実に注目し, ある言語で最も落ちやすいような母音はまた話者の意識に最も抵抗少なく挿入されるといっている. 日本語 /u/ の知覚的きわ立ちのなさ, 「中立性」はその音声的性質に起因していることは明らかだが, Mieko S. Han (*Japanese Phonology: An Analysis Based upon Sound Spectrograms* [Tokyo, 1962], p. 15) は, 同じ環境で [ɯ] は日本語の母音のうちで最も短いという. 事実は確かにそうであろうが, 音声的環境, 発話のスピードなど, 母音の長さを比べるための条件を全く同じにすることは大変むずかしいであろうし, また, スピーチを単音に切る操作 segmentation 自体大きな問題を含む. 従ってここに与えられている数字の信頼度ははっきりしない.

後舌母音の /u/ でなく前舌母音の /i/ をとる.[4)]

英語	日本語	例
/-č/	/-ci/	match→マッチ
/-ǰ/	/-zi/	page→ページ

しかし，英語の同じ硬口蓋音 /-š/ は日本語に入ると /si/ [ši]（直音）/sju/ [šɯ]（拗音）両方になる．例えば cash は日本語でキャッシ，キャッシュ両様になる．これは挿入母音として「中性的な」/u/ を用いる傾向が強いことを示す．なお，上でみた英語の /-č/ が常に日本語の「チュ」でなく「チ」になるのは，擬声語を除き，拗音「チュ」は長音の「チュー」として以外に現われないことから来ている．

以上から明らかなように，原語C如何によつて，（および，それが日本語に入つた時の日本語のC如何によつて）挿入される母音が何であるかがきまつてくる．ところでこれら規則的な母音挿入に対する例外も起る．それは次の二種類に大別される．

1．外国語の前舌母音のあとの /k/ は日本語で /ku/ でなく /ki/ となることがある．例：cake→ケーキ，英語 text→テキスト．

2．外国語の流音 /r, l/ は日本語で流音 /r/ となるが，流音のあとの母音と同じ母音がその前に挿入され，その結果上の規則が破られることがある．例：オランダ語 glas→ガラス，ポルトガル語 Christ→キリスト フランス語 croquette→コロッケ．なお，ガラス，キリストをそれぞれ比較的新しい外来語グラス（←英語 glass），クリスマス（←英語 Christmas）と比較すると興味深い．

III. 例外的事実についての可能な解釈

以上の例外についての可能な解釈を考える。

1．外国語の前舌母音のあとの /k/

4）Han（p. 15）によると，/u/ の次に短いのは /i/ であり，その次に短いのは /o/ である．

第一の解釈　外国語の前舌母音のあとの /k/ は前よりの [*k*](prevelar または postpalatal) である．日本語に入つて生ずる /ki/ はこの「前より性」の表現である．

これは次の事実によつて支持されるかにみえる．日本語のキシ, クシのような対語で第一の拍ではそれぞれ母音は無声化するか完全に落ちている．即ち [*k*(*i*)ši], [k(*u*)ši] である．またカキ, カクの低い二つめの拍の母音も無声化しがちである．即ち [ka*ki*], [kak*u*] である．日本人はこれら最小対立語を区別するのに母音の質のちがいよりはむしろ先立つ /k/ が前よりの異音であるか否かに頼つているように思われる．いいかえれば, /k/ の前よりか否かは日本語において示差的 (distinctive) ではないが,「キ」と「ク」という二つの拍を区別する際の重要な手がかりとなり得るため, 日本人の耳は特にこの性質に敏感であるといえる．

従つて日本人は英語の deck [dɛ*k*] (またはオランダ語の dek) と英語の dock [dɔk] (またはオランダ語の dok) を聞いて最後の子音をそれぞれ「キ」「ク」と聞きとり, そのように区別して表現する．このような推察の根拠は母音の無声化ということであるが, 外国語の前舌母音のあとの同じ軟口蓋子音 /g/ が日本語に入つて /gi/ または /ŋi/ になるという並行的事実が存在しないことはこの根拠の正当性を裏づけるようにみえる．しかしこの種の外来語は数が少なすぎる[5]ため断定的なことはいえない．

なお, ここで問題にしている「外国語の語末または子母の前の /k/→日本語 /ki/」と並行的な現象が外国語の母音の前の /k/, /g/ についても生ずることがある．一般に英語 /æ/ →日本語 /a/ なのに, /k, g/ のあとではそうでない．例えば英語 bat/bæt/→日本語バット /baQto/ と英語 cap/kæp/→日本語キャップ /kjaQpu/, 英語 gap/gæp/→日本語ギャップ /gjaQpu/ を比べるとよい．英語 /kæ, gæ/ において前舌母音 /æ/

5）ただし, 外国語で語中の子音結合 /-gz-/ をもつものについては, 以下 IV を参照．

の前の /k, g/ は前よりの異音 [*k*, *g*] である．日本人はこの [*k*, *g*] の「前より性」を鋭く捉え，/kj, gj/（音声的に [*k*j, *g*j]）と表わす．この場合，非音素的，非示差的な [*k*, *g*] の「前より性」を日本人が捉えるのは日本語に拗音節（CjV）が存在するからにほかならない．[6] なお，英語 make-up→日本語メーキャップは二つの場合が重なり合つた興味深い例といえる．

第二の解釈 外国語の前舌母音は日本語に入つて一般に前舌母音となる．そして日本語の前舌母音のあとの /k/ は前よりの異音 [*k*] になりがちである．前よりの異音 [*k*] は後舌母音の /u/ を伴うことができず前舌母音 /i/ をとることになる．

第一の解釈が，日本人の英語音ききとり（perception）の立場からなされたのに，この解釈は発音（production）の立場から下されている．日本語の前舌母音のあとの /k/ は前よりの異音 [*k*] となるということは強い傾向としていえるだけで必ずそうなるというものではない．このことは「イキ」[i*k*i]，「イク」[ikɯ] がともに日本語であり得ることからも分る．外国語の前よりの [*k*]→日本語 /ki/ がこのように説明されるのであればこれに並行して，外国語の前よりの有声音 [*g*]→日本語 /gi/ または /ŋi/ があることが予想されるが，上に述べたとおりこの種の外来語は少なすぎる．

Denzel Carr[7] は今問題にしている現象をとり上げて perception の立場からの解釈（我々の第一の解釈）と並べて production の立場からの解

6）これは一種の過多区別（overdifferentiation）といえよう．しかし，[*k*, *g*] の「前より性」は日本語においても非示差的なのであり，これの把握は日本語の特定の拍 /cjv/ によって支えられるのであるから，その特殊な一型であるといえる．過多区別および過少区別（underdifferentiation）の一般的性格については，Uriel Weinreich, "On the Description of Phonic Interference," *Word* 13 (1957), p. 5 参照．

7）Carr, *Language Learning* XIV, pp. 30-31.

釈をあげ，これを「母音呼応」(vocalic echoism) と呼んでいる．母音呼応とは，彼によれば一種の母音調和 (vowel harmony) であるが，母音調和を格変化など形態音素的変化に限ろうとしたため，[8] 区別してこの呼び名を用いたのである．しかし，我々が問題にしている /k/ のあとに挿入される /i/ がほとんど常に前舌母音に先立たれるとしても，直ちにこれが（前舌母音による）母音調和であるとみなすことはできない．この現象では常に /k/ 音素が母音間に存在しているからである．母音調和では介在する子音が何であるかは問題にならないはずである．私は第二の解釈で，前舌母音の影響がまず続く /k/ に及び，これを前よりの異音 [*k*] にし，更にそれが，前舌母音 /i/ を必要とすると考えた．いいかえるなら，この解釈においては同化 (assimilation) のプロセス二つの連続が考えられている．この点 Carr の母音調和的解釈とははつきり異るのであるが，私は彼の「母音呼応」という用語を借りて私の解釈するプロセスの呼び名として用いることにする．

第一の解釈と第二の解釈とを比べると第二の解釈の方がよいように思われる．それは次の理由による．(1)特に英語の語末の /p, t, k/ ははつきりした破裂 (release) を伴わないのがふつうであるため，英語を母国語とする人々でさえもコンテクストの助けなしには語末のこれら三つの閉鎖音を区別することに困難を感ずる．[9] 日本人が，この不明瞭な閉鎖音のこまかい音声的特徴を，異る拍として把握できるかどうか疑わしい．私は滞米中にアメリカ中西部出身の男子大学院学生に最小対立語 kick-cook-cock/ lick-lack-luck-look/x-ax-ox/becks-books-box を発音してもらつてそれぞれ

8）形態音素的変化における母音調和は現代語ではトルコ語にみられるものが最もよく知られている．また古代日本語にもその例がある．「国語学辞典」訂正15版（国語学会編）東京堂 (1967)，pp. 848-850 参照．

9）Fred W. Householder, "Unreleased ptk in American English," *For Roman Jakobson: Essays on the Occasion of His Sixtieth Birthday* (The Hague, 1956)，pp. 235-245 参照．

の /k/ 音素の音声的ちがいをききとろうとしたが不可能であつた.[10] (2) 日本語における外来語の発音成立過程を考えると，言語接触の特殊事情から，perception より production の方が重要な要因であるようにみえる. 特に「外国語の語末の /k/→日本語 /ki/」がほとんどの場合古い外来語に現われるという事実は，次章Ⅳで詳説するとおり上のことを示唆している.

次に，上の解釈ではうまく説明できないようにみえる例を考える. production の立場からの解釈を採用すると，一見説明できなくなるような例がある. 英語 jack→ジャッキ，英語 saxophone→サキソフォンなどである. 英語の前舌母音 /æ/ は日本語では非前舌母音の [a] に移されるからである. これは [džæk], [sæksəfoun] の [k] の「前より性」が捉えられたという第一の perception の立場からだとうまく説明されそうである. 更に，英語 tuxedo→タキシードは二つの立場いずれからも説明がつかないようだが，第二の production の立場から，後続する [-ši:-] の影響と解釈できそうである. つまり，これまでの例が順向的同化 (progressive assimilation) の例だつたのに，これは遡向的同化 (regressive assimilation) の例である.[11] なお，Marx が日本語でマルクスであるのに Marxism はマルキシズムであることを考えあわせるとよい. 更にオランダ語 jak [jak] またはフランス語 jaque [žak]→チョッキ，英語 jug [dž∧g] →ジョッキ，英語 bauxite [bɔ:ksait]→ボーキサイとなると日本語中の「キ」は説明が容易でない. チョッキ，ジョッキについては通俗語源 (popular etymology) を理由として提出したい. チョッキのキは「着」と，ジョッキのキは「器」と解釈され易かつたと思われる.[12] 同じことが

10) 心理実験において，自分自身を被験者にすることは方法論的に正しくない. しかし，この場合には，被験者が一種の言語学的判断を下すことが要求されるので，一般の被験者を使うとかえって客観的結果がでにくいと思われた.

11) 遡向的同化，順向的同化については「国語学辞典」，pp. 678-679 参照.

12) 楳垣実(「日本外来語の研究」研究社[1963]，p. 80) は文明開化期にチョッキは「直着」と漢字で表わされていたといっている. この語の第一拍も、とりわけそれがオランダ語から入ったとする場合通俗語源として以外には理解しにくい. なお、その他の通俗語源の例については同書 pp. 116-117 参照.

ジャッキについても（上ではちがう解釈が提出されたが）いえるように思われる．なお，jug→ジョッキでは英語 /g/→日本語 /ki/ がみられる．これは促音のあとに有声の /g, ŋ/ は起りにくいため対応する無声音 /k/ となつたのである．（類例：英語 handbag→ハンドバック）ボーキサイトの発音は次章Ⅳで詳説するように，x という文字に起因すると思われる．サキソフォン，タキシードについては上で別の解釈が提出されたが，同様 x という文字の影響が考えられる．

2，流音 /r/ の前に挿入される母音

すでにあげたガラス，キリスト，コロッケのほかにタラップ（←オランダ語 trap），イギリスまたはイキ°リス(←ポルトガル語，Inglez)，ギリシャ（←ポルトガル語 Grecia）など古い外来語ばかりである．イギリスは更に古くはエゲレスであつたし，またオロシャのように規則的には流音で始まるべき外来語の先頭に流音のあとの母音が加えられることもあつた．福沢諭吉「学問のすすめ」には，次の二つの興味深い例が見出される．(かつこ内の数字は岩波文庫版で該当例の見出されるページ数)

ミッヅルカラッス（←middle class(es)）(55, 56)

フランキリン（←Franklin）(139)

この現象は，明らかに日本語の流音 /r/ の音声的性質に起因している．日本語 /r/ はほとんど常にはじき音 [ɾ] を異音とする．このはじき音は，舌先をごく軽く，ごく瞬間的に[13]上の歯茎に触れさせることによつて作り出されるから，前後の母音を分ける力が非常に弱い．[aɾa]，[iɾi]，[ɯɾɯ]，[eɾe]，[oɾo] を日本人が発音するのを外から観察すると，始めから終りまで口のかまえはほとんど全く変らない．それに対して [apa]，[ipi] などはもちろんだが，[ata]，[aka] などでも日本人が発音する時口のかまえの動きがみられる．発音上の「生理的怠惰」「生理的惰性」の原

13) Han(p. 54) によると，日本語の /r/ はふつう 2-3 centiseconds で，ゆっくりしゃべる場合でも 5 centiseconds を出ないという．そして調音点の大体同じ有声閉鎖音 /d/ と比べて呼気遮断の長さはずっと短いという．

則からいつて，日本語の /V_1rV_2/ において V_1 と V_2 を同じにしようとする傾向が生じがちであると想定するのは正当である．ここで問題にしているような外来語では，V_2 は外国語の原語中にすでに与えられており，一定の型からそれにくいが，V_1 は日本語で新たに挿入されるのであるから，V_1 の方を V_2 の方に合わせようという傾向が強く出てくるのである．この事実は日常の会話においても認められる．一般に気づかれずにすぎるけれども，早い無造作な発話では，「プロ野球」はポロヤキューに，「プレゼント」はペレゼントに聞えることがある．

1の型を私は Carr の用語を借りて「母音呼応」と呼んだが，ここで扱つた2の型をも私は同じ名前で呼ぼうと思う．ただ両者がちがうのは1の場合主として順向的なのに2の場合は遡向的と，呼応の方向が逆である点，また，1の場合呼応する母音は前舌母音であれば，同一である必要はないのに，2では前舌，後舌にかかわりなく同一母音の呼応であるという点である．

ところでこれらの現象は，発話という言語行動が統合された全体であり，それが音素の継時的配列であるというのは言語学的虚構（もちろん必要な虚構）であるという事実に起因している．そして言語行動の統合性は脳や神経の働きと明らかに関係がある．Joos[14] は大脳中枢から通路は別だが同時に重なり合う神経支配波 (overlapping innervation waves) が出てこれが小脳においてひとつの波に合成されるから，ふつうの条件では発音が円滑にできるという仮説を立てた．Lashley[15] は行動一般における連鎖的順序という問題をとり上げ，脳と神経のどのような働きがこれに関与するかを考えた上で，この問題についての考えは結局仮説の域を出ず，詳細は明らかになし得ないといつているが，言語行動を含む連続的行動が

14) Martin Joos, *Acoustic Phonetics*, Baltimore, 1948, pp. 109-110.

15) K. S. Lashley, "The Problem of Serial Order in Behavior," *Psycholinguistics: A Book of Readings*, edited by Sol Saporta, New York (1961), pp. 180-198.

統合された全体を形成しており脳や神経の全体的統合性に支えられていることは認めている.

IV. 外来語の発音の成立過程に関する仮説との関連

日本語中の外来語の発音成立過程を考える場合考慮すべき重要な要因は次の三つであろう. (1)借入の時期, (2)発音を通して入つたか, 視覚即ち綴字を通して入つたか, (3)受入れる日本人がその外国語に通じているか否か. これら三つの要因と関連して, 外来語発音の成立過程について次のような仮説が立てられる. (1)古い時期の外来語は長い時間の経過中に発音の日本語化を生じ日本語の中に完全に定着していくが, 新しい外来語は外国語的発音特徴をとどめ日本語中に十分定着しないことが考えられる. (2)綴字を通しての外来語の導入ということは次の相反する結果を生むと想定される. 同時に, 何らかの仕方でその外来語の発音も知られている場合, 綴字は発音を知るための手がかりを与えてくれるから, 外国語原語の発音をむしろ保持するための力となり得る. しかしまた, 綴字が知られているために, 日本語の発音とそのローマ字綴りとの対応からの影響をうけやすくなり, 発音の日本語化が促進される. 例えば日本語ローマ字綴り *a* は日本語の「ア」[a] を表わすために, [æ] と発音される英語の綴字 *a* を [a] と発音する類である. これは Jenkins の図式では次のようになり, 分岐的構造 (divergent structure) である.[16]

第一学習 (背景の日本語)	第二学習 (英語)	テスト
$S_1—R_1$	$S_1—R_2$	$S_1—R_2 \rightarrow R_1$
a [a]	a [æ]	a [a]

ただ, この場合外国語の綴字が少くともある程度までは表音的 (phonetic) であることが必要である. (3)外来語をうけ入れる日本人がもとの外国語に, 特にその発音に精通している時は外国語の発音がかなりよく保存さ

16) J. J. Jenkins, "The Learning Theory Approach," *Psycholinguistics*, edited by C. E. Osgood and T. A. Sebeok, Bloomington (1965), pp. 24-25.

れるであろう．それに対して外国語が日本人によく知られていないものであれば，日本語化がすすむであろう．

ヨーロッパ諸言語からの語の日本語への導入をかえりみる時，次のことがいえよう．最も古く室町時代のいわゆるキリシタン文化時代からスペイン語，ポルトガル語との接触が始まり，これらの言語からの借入語がみられるようになる．その後，オランダ語からの影響が起り，幕末から明治初期にかけてはフランス語，英語からの影響が新たに加わる．そして，明治後期から大正，昭和，特に第二次世界大戦後，おびただしい数の英語が借入されるようになる．[17] このごく概略的な外来語の歴史を上にあげた三つの重要な要因および三つの仮説と関連させて考えると次のことがいえよう．(1)古い借入語，特に明治以前の借入語は著しく日本語化し，もとの外国語の発音をほとんど全く失つているであろう．そして，恐らくその結果通俗語源をうけいれやすくなる．それは次の理由による．(i) 借入から今日まで長い時間が経過している．(ii) 日本に渡来する外国人は非常に少く，彼らに接する日本人も非常に少い．本国人が話す外国語の発音に日本人が接する機会はほとんどなかつたであろう．このまれな機会を得た日本人でさえも外国語の知識を有していなかつたであろうから，彼らによる外国語の借入の段階ですでに発音のかなりの日本語化が生じたであろう．そして借入語が，外国語の知識をもたぬ一般大衆の間に広がるにつれて，日本語化は更に進んだであろう．(iii)「蘭学」の存在はあつても，外国語を読む必要は非常に少数の学者に限られており，綴字からのいかなる影響も問題にならない．(2)開化期以後の明治，大正，昭和の外来語は上にみた古い外来語より外国語の発音上の性質を保存していることが，様々な要因から予想できる．しかし，とりわけ第二次大戦以後に入つた外来語は発音の点からみてそれ以前の外来語と区別する必要があろう．なぜなら，(i) 戦後，中等教育以上での英語教育普及はめざましい．読み書きの指導は従来

17) 楳垣「日本外来語の研究」，pp. 46-95 参照．

にも増してさかんとなつたが，その他に，話す方面での指導にも非常に大きな強調がおかれるようになつた．英語を読むことの指導がさかんになつたことは，ローマ字教育の普及および日本人教師の与えるモデルが日本語化した英語であることと相まつて，逆に発音の日本語化を促す要因にもなるが，英語発音教育の向上はこれを補つてあまりあるであろう．(ii) 日本に来る外国人（特にアメリカ人）の数はおびただしく，一般日本人が原語民による外国語（特にアメリカ英語）の発音に接する機会は著しくふえた．また，直接でなくても，映画，レコード，ラジオ，テレビなどを通して外国語の発音に接する機会は戦前とは比較にならぬほど増加しており，接触を避けることがむしろ不可能である．

戦後入つた外来語は，外来語辞典などには記録されていなくても日本人が会話中にはさむ外国語を含めると，非常な多数にのぼる．そしてこれらぼう大な数の外来語は話者の外国語の知識の差に応じてちがいはあつても，相対的にかなりよく外国語の発音の特徴を保存しているといえる．

我々が問題にしている母音呼応を外来語の歴史と関係づけて分類すると次のようになる．(1)第一の型の母音呼応「外国語の前舌母音のあとの /k/ →日本語 /ki/」は，語末に起る限り，比較的古い外来語にみられる．[18] 例：ブリキ←オランダ語 blik（江戸），ブレーキ←英語 brake（明治），ステッキ←英語 stick（明治）

(2) 第一の型の母音呼応が子音の前でおこる時，その子音はほとんど常に /s/ である．この種の母音呼応は非常に新しい外来語にもみられる．例：エキサイト←英語 excite（明治），テキスト←英語 text（昭和），ミキサー←英語 mixer（現代）

(3) 第二の型の母音呼応が現われるのは非常に古い外来語，ほとんど明治以前の外来語に限られており，英語から入つた語にはその例がみられない．

---

18) ここで示す外来語が日本語に入った時期は楳垣実編「外来語辞典」，東京堂，1966に与えられているものをとった．

かくして(1)(3)の母音呼応は，借入当時の言語接触上の特殊事情や，借入後今日までの長い時日の経過に起因する「発音の日本語化」の例として説明できる．それに対して(2)の母音呼応は，(1)と同じ発音生理的説明が与えられ，第一の型の母音呼応と呼ばれるのが正当であるにしても，何らかの意味で両者を区別すべき特徴が存在するにちがいない．事実，外来語の発音でなく外国語としての英語の発音において(1)の発音はほとんどきかれないが，(2)の発音はしばしばきかれる．例えば，教室で deck, stick などを［-ki］と発音する日本人学生はほとんどないが，lexical, flexibility などを［-kis-］という者は非常に多い．その両者を区別する特徴として，(2)の母音呼応がおこるのは外国語の原語が文字 x を有する場合だという事実が考えられる．即ち，「外国語（ほとんどすべて英語）の前舌母音＋/k/＋子音→日本語の前舌母音＋ /ki/ ＋子音」の子音は /s/ 以外でもいい(例えば /t/) はずだが，今日の日本語中の外来語にはその種のものはない．しかし今日ほとんどすたれてしまつた明治以前の外来語にはエレキテル（←オランダ語 electriciteit (江戸)）などの例がある．また，外国語の語中の子音結合 /-ks-/ は x 以外の文字で表わされていてもいいはずだが，今日の外来語中にはそれは比較的まれなエキセントリック（← 英語 eccentric のみである．

(1)の型の語は外国語の原語で，一般に k または ck の綴字で終っている．この綴字が，日本人に対して示唆する発音は［kɯ］であつて［*k*i］ではない．［*k*i］が示唆されるためにはあとに i または y の文字が必要であろう．すでにみたとおり，日本語の前舌母音は発音生理的にいつて［kɯ］より［*k*i］を伴いやすいことは事実だが，［kɯ］を伴うことが不可能では決してない．上にみた外来語の歴史からも明らかなように，明治以後外国語の教育が次第に普及し，外国語の綴字が日本人にもよく知られてくるにつれて，この綴字の知識が，発音生理的にはより自然な［*k*i］を阻止して［kɯ］の使用をすすめ，また通俗語源［*k*i］を阻止する力となつて働いてくることは容易に想像できる．全く同じ原理が(3)の型の語にもあてはまる

であろう．オランダ語 glas から入つた古い借入語が早くからガラスとして定着してしまつたのに後に英語の glass が（恐らく綴字ともどもに）知られた時は g という綴字は［ga］より［gɯ］を示唆するから，「発音の容易さ」という原則をいくぶんぎせいにしても，グラスという外来語となつて現われた．なおこの場合には発音のちがいが意味の区別をし得るという利点もある．（ついでに，これと関連してストライキ—ストライクを考えるとよい．）

ところで(2)の型の語は原語が x という文字をもつ．この文字はいわば複合文字で，k, ck ほどは日本人に対して強く［kɯ］という発音を示唆しはしない．従つて，前舌母音のあとの /k/（text など）前舌母音の前の /k/(tuxedo など）を /ki/ で表わそうとする発音生理的に自然な傾向が綴字によつて阻止されることは少いであろう．それどころか，x という文字が日本人に対して /-kus-/ よりはむしろ /-kis-/ を示唆するということも起り得て，テキスト，タキシードなどの発音を今日まで固定させる結果が生ずるのみならず，ボーキサイト，サキソフォンなど発音生理的には全く説明のつかない /-kis-/ の使用がみられるのである．[19]

外国語の語末の［*k*］が日本語の /ki/ になるのと並行的な外国語語末の［*g*］→日本語 /gi/ という現象はみられないことは上に述べた．外国語の，語末でなく子音の前の［*g*］はどうなるであろうか．この種の外来語は非常に少いが，少いこの種の外来語で語中に［-*gz*-］をもつものはほとんど規則的に日本語で /-kiz-/ をもつという事実は注目に価する．例えば英語 exotic→エキゾチック，英語 example→エキザンプルである．これらはいずれも原語が x という文字を有している．x という文字は原語において無声子音結合 /-ks-/ を表わすか有声子音結合 /-gz-/ を表わすかに

19) しかし，実際には文字 x も昭和に入ると次第に /-kis-/ から /-kus-/ を示唆するようになってきたことは，次のような発音の移り変りからうかがわれる．インデッキス→インデックス，エッキス→エックス，ボキシング→ボクシング．なお，楳垣「日本外来語の研究」，p. 104参照．

応じて日本語では /-kis-/ か /-kiz-/ になる．即ち第一の拍は /ki/ で共通，第二の拍が /s-/ か /z-/ かによつて原語の有声，無声が区別される．[20] 文字 x が原語で有声子音結合を表わす場合にも，日本語で挿入される母音として /i/ が好まれるという事実がここに指摘されよう．

V．ま　と　め

1．日本語中の外来語において新たに挿入される母音の一般的型に対する，ここで扱つた二種類の例外は類似の現象であり，その現象は母音呼応と呼ぶことができる．ただ両者において母音呼応の方向は大体において逆であり，また呼応する母音相互の類似度は異る．この現象は結局，発話はより小さな単位に確然と細分化されるべきものではないという「言語行動の全体的統合性」に起因している．

2．日本語とヨーロッパの諸言語との接触に関する特殊事情—これは日本の地理的歴史的特殊事情に起因するが—から，外来語の発音は原語民による原語の発音の聴覚印象のみを通して成立するのではなく，「発音生理的容易さ」や，「綴字の影響」なども考慮されねばならないということになる．ここで考察した二種類の外来語あるいは第一の型を二つに細分して三種類の外来語は，外来語発音成立のためのこれら要因をかなりはつきり示してくれる．

---

20) 音声的には，母音が無声化するか否かのちがいもある．即ち，/-kis-/ は [-*ki*s-]，/-kiz-/ は [-*k*i(d)z-] で，原語の /-ks-/ 対 /-gz-/ がこの点でも区別されている．また，Alexander /æligzǽndər/ がアレキサンダーに exhibition /èksibíšən/ がエキジビションになるように原語と外来語の発音の対応がくいちがう場合がある．これらの語が原語の発音の直接のききとりによって導入されたのではないことが推測できる．